

Viator

VOL.007



Merry Christmas

懐かしいナドウ神父さまより北白川教会の信徒の皆さまにクリスマスメッセージをいただきました。

神父さまは現在モントリオール近郊のジョリエット修道院にてお元気でお過ごしです。

聖母マリアの取次ぎの偉大な力

ヨゼフ・ナドウ神父

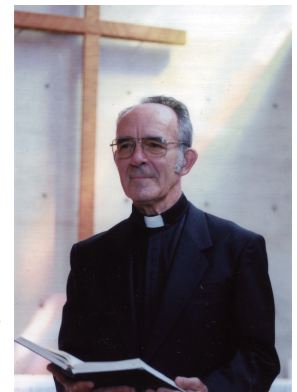
イエス・キリスト誕生の次第は次の通りである。イエスの母マリアはヨセフと婚約していたが、同居する前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった。(マタイ 1:18)

マリアは、妊娠して、主イエズスを出産なさいました。主イエズスは普通の子供ではなくて、人間でありながら父なる神様の御子です。なぜ神の子イエズスが人間の姿でこの世に生まれたかと言いますと、父なる神のご希望としてご自分の命を犠牲としてささげて、十字架上で亡くられるためです。主イエズスの死によって、人類が罪を許され、神様と和睦して、永遠の命を喜ぶことが出来るようになりました。

神の御子自身が、罪を犯した人間を救うために、その命をささげることはなんと不思議なことでしょう。罪を犯した人間こそ、自分の罪のために謝罪すべきではないでしょうか。

更に不思議なことに、父なる神様は御子をこの世に送り出されて、御子は人間の姿となりました。御子は、聖霊の力によって身ごもられた女性から、人間と同じようにお生まれになりました。従って、救い主イエズスは、神の御子でありながら、私たち人間と、罪を除いては、全てにおいて、同じになられたのです。

又不思議極まることには、人間に自由意志を与えられた神様が、御子の誕生においても、人間であるマリアの自由意志を尊重なさり、聖母マリアが承知されることを願われ、彼女は承諾なさったのです。有名な彼女の言葉、「思し召しどおりになりますように」と。



偉大なる神様が人間を救うために、人間であり、女性である乙女マリアに協力を望まれ、承諾なされることを願われました。その結果マリア様は、偉大なる神様と人間としてのイエズスの誕生に、密接に協力なさったと言えるでしょう。

信仰者は皆「神の国がきますように」と、祈りなどで色々と神様と協力しますが、聖母マリアの神へのご協力は特別です。救い主イエズス自身の御母として、神様と協力なさった人間として、永遠に世々に褒められるのです。「わたしの魂は主をあがめ…（ルカ1：47）」。

従って、彼女の神様にたいする私たち人間のための取次ぎの力が、どれほど大きくて力強いかがよく分かります。

憶い出

ジョセフ・マカダム

人の記憶に残る事柄は、時間の多少によるものではありません。たとえ、一期一会の出会いでも、鮮やかな記憶として留まることもあります。

ホルヘとの場合もそうでした。私が日本に派遣されるまでの彼との6年間は、私にとって素晴らしい出会いであり、大切な日々であったと思います。

1958年、アルゼンチンの首都ブエノス・アイレスから700キロメートル離れたコルドバ市にあった、イエズス会修練院（第1期間）に入会した二十名余りの新生徒同士として、初めて彼と出会いました。（イエズス会は、修練期を含めて司祭叙階まで14年前後かかります。）

哲学期と神学期（第3、第5期間）の100名以上の学生が学ぶ建物の広い廊下を、まるで壁にくっついているかのような神学生が慌てず、ゆっくり、頭を少し下げて何かを考えているかのように、此方に向かって歩いて来ます。



ブエノス・アイレス郊外、サンミゲルにある、コレヒオ・マクシモ・デ・サン・ホセ（哲学期と神学期）

私は、どんな時にも、彼が急いでいる姿を見たことはありません。21歳のとき、肺にキスト（のう胞）が見つかり、片方の肺の一部を切り取ってしまったので、走ることはもとより、早歩きも出来なくなると聞きました。後日、彼と私は小さい時から、同じサッカー・チーム「サン・ロレンソ・デ・アルマグロ」の熱狂的なファンだったと分かりましたから、彼も、子供のころはサッカー遊びに明け暮れていたと思います。神学生同士のサッカーの試合に参加できず、さぞ、悔しい思いをしたに違いありません。手術の後はずぐ疲れてしまうため、息切れがしないよう、低い声で、ゆっくり話さざるを得なくなったようです。彼いわく、「このため、将来、歌ミサが出来ないから、非常に

助かるよ。なにしろ、大音痴だから。僕が歌うと、信者全員が教会からいなくなってしまう」と、笑っておりましたが、彼のために弁護しますと、正確に歌うことは出来ませんでした。音楽は大好きで、アルゼンチン・タンゴやミロンガ(タンゴより歴史が古く、メロディも早い曲)の知識は玄人はだしで、昔はよく(上手に?)タンゴを踊ったと聞かされました。また小さいころ、兄弟姉妹5人で、お母様と一緒に小さなラジオを囲んで、オペラを聞いていたせいで、クラシック音楽の愛好家でもあり、現在でも、音楽を聴きながら、読書をするのが最大の趣味だそうです。

彼は、まるで壁と一緒に、廊下を歩いているようです。

ポルテーニョ(ブエノス・アイレス人のニック・ネーム)の性格からみれば、舞台の立役者になりたがる人が多いのですが、彼は違っていました。ふだん物静かで、また多少内気でもあった彼が、一旦、人の輪の中に入ると、まるで変身したかのようでした。微笑みを絶やさず、相手をユーモアで、時には鋭く、大好きな冗談を言っていた光景をよく見かけたものです。また、人の話にも熱心に耳を傾けることができたことは、彼の温かい人柄によるものだったと思います。出会った人々、その人の親せきや友人、そして彼らの犬や猫、又ほかのペットの名前にいたるまで覚えておりましたのは、特に、記憶力が優れていただけではなく、彼のあふれる愛情の所以によるものです。このことは、今でも、印象深く思い出します。



彼は、すれ違う折、すこし含羞んで微笑んでいます。

ブエノス・アイレスから約 70km 離れたルハンにある、バシリカ・デ・ルハン(アルゼンチンを守護する聖母マリアの大聖堂)の前の神学生のグループ。ホールは一番後ろ3列目中央。

又、以前お母様が長い間病気でいらした時、食事の支度を手伝っていたそうで、愉快的料理談義は勿論、お料理も得意で、休みの日などに彼が作ってくれたミラネサ

(パン粉付きカツレツ)、ファルシ(豚の詰め物)、パスタなど特にイタリア料理は、懐かしく思います。

私は、彼がイエズス会を選んだ理由の一つは、より厳しく自分を律するためだったと聞きました。私から見れば、十分思慮深く、また、自制心のある彼からは、随分と意外な気がしましたが、彼自身はそう考えていたようです。また、特にミッションを標榜するイエズス会にも以前から憧れていて、入会后、当時のイエズス会総長、ペドロ・アルペ神父様に宣教師として日本に派遣して欲しいと嘆願書を出されたそうです。

思い出せば、講義なども、いつも一番後ろの席に静かに座しておりました。彼をみて、

私は心の最も深いところの声に耳を傾け、真摯に、自分に忠実な生き方をしたいという彼の意志を強く感じました。明晰な頭脳、伝説的な記憶力、読書力は、当時の厳しい学部長、ミゲル・アンヘル・フィオリート神父様が彼を自分の研究のアシスタントに呼ばれたことでもわかります。特に、聖イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』の研究などを手伝われたそうです。

イエズス会総長から、日本へのミッションは、肺の病気のために、大変難しいと言う返事が届いたことは偶然でしょうか。

ホルヘ・ベルゴリオが、廊下の遙か向こうに通りすぎてから、50年を経て、私は全てが神様のお導きであったことがわかりました。

彼が日本へ派遣されていたら、私たちのパパ・フランシスコは誕生しなかったに違いありません。

クリスマスを迎えて

アルフォンソ村田源次 (1915-2007)

1954-1960 北白川教会主任司祭

(1955年12月25日発行の北白川教会広報誌「St.VIATOR」より再録)

クリスマスと新年に皆様の上に天主様の豊かなる祝福を祈り、又、天主様が皆様の為に本当の喜びの年にしてくださらんことを祈り、クリスマスと新年の御挨拶と致します。尚、皆様が御存知の様にクリスマスと新年は皆様の為にミサをお捧げ致します。

日本はあたかもキリスト教国の様に11月中頃からクリスマスの為に賑わい、今月中頃から多くの処にクリスマスのジングルベルがなりひびく様になりました。然し教会は待降節と申して12月24日まで痛悔から出る犠牲を説教していますが、それも忘れられがちになる程、外からの騒ぎが強くなるようになりました。皆様はこのクリスマスの眞の意味をご存知ですか。

即ちアダムとエワが罪を犯したその結果、人類が楽園から追い出され自然の不幸な生活をしなければならなくなりました。その不幸を悲しみ、憐れみ給うた天主様は、人類を天主様の御国に連れ戻す為にその御独子を此の世に遣わすことを御約束になり、人類がよく理解できるようになった頃、即ち1955年前に罪のつぐないの為に人類の救いの為に御独子が受肉なされ此の世にお生まれになったのです。此の尊い神の子の受肉は人類への愛によるものであるにも拘わらず、キリスト様を迎えるより迎えた時の喜びだけを味わっているのが日本の現状でしょう。私達信者、求道者は未だにこのような不幸な人々にクリスマスの眞の意味を教える可きでしょう。

今月号に二三人の方々異なる国々のクリスマスについてお書き頂き、具体的な精



神を知ることが出来ることと喜んでいます。私達はこれを教えなければいけません。昨年のクリスマスに買物の為に小さいお店に行きますと「おたくはクリスマスがありますか」「勿論」相手は私が教会の神父であることを知っていた故、斯かる質問をなされたのです。それがあまりにも皮肉的でしたから、カトリックの喜びだけを皆様は取っているのです、と答えて笑い話になったことがあります。クリスマスの眞の意義を知っているのは大きなデパートの中にも恐らく数える位の人だけでしょう。私達ももっと勇気を出してこの意味を教え、眞の祝福を凡ての兄弟たちに分け与える可きでしょう。

カナダ、ケベック州では、待降節は四旬節と同様に毎日が大斎であり、御ミサに与る人数は多く、殊に十一時四十五分から行われる御ミサには昼休みを利用して多くの会社員が与っています。そして雪国であるカナダでは自然の木に豆電球が飾られ、二十四日は大急ぎです。十一時頃から教会へギューギュー音を立てながら雪を踏んで歩く人々、自動車で行く人々、ソリの馬の鈴の音はことに異様に聞こえます。

御説教に続いて、「しずけき」の音楽、それから御ミサ。第二第三のミサ後は家庭の一年中の一番嬉しい時です。それはキリスト様の御誕生を祝う喜びの時だからです。この様なクリスマスが早く日本にも行われる様に祈り教えるべきでしょう。

今年中に受洗者は十二人(但し去る1月から)結婚7組(信者4組、信者・未信者3組)死者1人という喜びと哀しみがありました。他方、希望の星会の解散、然し新しく曙のマリア会誕生。ケルブ会(中学生会)は最も活躍し、この月報をはじめとして遊んだり食べたりに大童わです。女学生部は段々と聖歌隊を編成しつつあり、希望の星が輝き始めました。お父様たちの集まりは一度でしたが、来年は必ず毎月一度の集会を持ち、教会の発展の為に働いて下さることと信じます。婦人会は毎月の第二土曜日・去る五月のバザー・聖堂の美しいお花等、凡てお母様達のお蔭です。ステラ会(女子青年部)は聖堂のお掃除。お勤めでお忙しいでしょうが続けられる様に。聖歌隊はアラール神父様を迎えて一躍進という所。教会では待望の美しい御像が一神父様のお蔭で12月20日着。新しい門、掲示板、電燈等、教会は夜分でも入り易くなりましたから是非どうぞ。又、教会で皆様に一番知られなかったコーナーは京都では他にない程に大きなルルドが出来上がりました。これも神父様、ブラザー様のお蔭です。然し信者、求道者の皆様が此処で子供達に信心を教えて下さることによってこのルルドもその意味をもたらすのです。教会御訪問の時には是非一度はルルドに行かれ、祈り、この教会の為に盡して下さる人々に感謝し、又この人々と共に教会の為に精神的に、物質的に励まれるように年の暮と新年に当たって喜びと希望を述べました。



1955年12月25日発行の北白川教会広報誌「St.VIATOR」

典礼奉仕者を経験して

非常にやりがいのある体験でした。案内係りに関しては、先ず、教会の入り口で、皆さんを「神の家」にお迎えするため、ご挨拶させて頂いたことは素晴らしい体験でした。特に、今までよく知らない方と言葉を交わすことができ嬉しかったです。いつも聖書の「神の民」を思い出しました。お陰さまで、係りをさせて頂くときは、もっと深くごミサを味わうことが出来ました。先唱に関しては、いつも、初代教会のことを思い出そうとしました。有名なパウロの書簡だけではなく、弟子たちからの手紙が遠方から共同体に届いたとき、信者は欣喜雀躍の思いでいっぱいだったのではないのでしょうか。その手紙が皆さんの前で読まれる時の熱気と、読む人の真心を思いますと、豊かな靈感を与えられました。ただ、日本語がすらすらと読めないのが、準備に時間が掛かりましたが。(J.M)

この2年半、先唱をさせて頂くことが出来た恵みに感謝致します。第一朗読、第二朗読、共同祈願の意向、拝領唱、キリストに向かう祈りの五つを先唱します。私の感想の第一は、第一・第二の聖書朗読の折に感じていることです。それは聖書を一人黙読しているのとは違って、ミサの朗読の時は臨在感を持って、今、ここに、共にいて下さる神に触れそうな気持ちになり、感動を味わいます。聖霊が働かれていると思うのです。感想の第二は上の朗読の時に感動と共に自分の小ささを感じる事です。神の助けを必要としている自分を見、ご聖体に養われる必要を強く思います。(I.H)

2年間先唱と案内係のご奉仕をさせて頂きました。先唱に関しては、私のような信仰薄い者がそんな僭越なことをしてよいものか、というとまどいがありました。勉強会に出席して諸先輩のお考えや信仰にふれる度毎に、自分の信仰が篤いか薄いかなどと自分で思うこと自体不遜なことだと思えるようになりました。今はただ、与えられたお役目を最大限誠実に務めさえすればよいと思ひ、拙いままになるべく気負わず(といってもやはり緊張しますが)祭壇に上がっております。

案内係としては、入口の扉の開閉を忘れていたり、席を探しておられる方に気付かなかつたりと、不手際ばかりでしたが、もう一人のお役の方(案内係は二人一組です)に助けられながら何とかお努めを果たすことができとても感謝しております。二年間ありがとうございました。(M.K)

編集後記

ボアベール神父様に巻頭言をお願いしたところ、「懐かしい信者さんからいいものを頂きました。この中の村田神父様の文章を是非載せて下さい。今の時代にも大切なメッセージが込められています。」と言われて見せていただいたのが1955年12月25日発行の北白川教会広報誌「St. VIATOR」でした。是非ご一読下さい。(広報部)